

# 奈良・平安時代の考古学的研究 I

—— 竪穴住居の系譜とその復原的考察 ——

小 出 義 治

## はじめに

1980年代は「秩序ある開発」が叫ばれる時代となり、国会審議の低迷に先駆けて神奈川など数都県では「環境アセスメント条例」が施行され、識者の間でホットな話題とされている。

それほどに '80 年以前の年代は乱開発の世代であった。この開発と宿命的な関係を負わされているのが考古学であるといえる。

考古学はこの開発ブームによって多くの発見を得て長足の進歩をみたと云える。しかし、それは世にアピールするような華やかな発見のみが、マスコミによって利用喧伝され過ぎた面が多分にあって、研究者は無為な破壊を恐れて開発の事前調査に追われ続け、そのため整理研究は心ならずも等閑に付されるといった傾向にある。

近年特に奈良～平安時代の遺跡発見例が激増して官衙・寺院の調査例が累加し、古代都城の研究は大いに進み、さらに下野国分寺・山田寺などの寺院址の発掘などの成果と相まって、木簡や漆紙文書の発見が相次ぎ、新たに木簡学会の発足をみたり、倒壊した寺院建築の一部がそのまま発見されて建築史上重要な資料を得るなど慶賀すべき動きの中で、その数百倍もの庶民集落が発掘されているにもかかわらず、余りにも地味な存在故か庶民史の研究は立ち遅れている。従って奈良時代の戸籍帳に残る戸の実態や、平安時代の荘園村落の実像は勿論のこと、その基礎となるべき竪穴住居址一軒の復原すら殆んど解っていないというのが実情である。

たまたま、先年来山梨市から、かつて吾々が昭和24年以来数次に亘って発掘

調査を行った山梨県東山梨郡日下部（現山梨市）遺跡の第1号住居址について復原家屋の基本設計を依頼された。

建築家でないだけに細部の設計は至難のこととして、文化史的な構想図としてなら考えようという事で応ずることとなったが、恐らく全国で始めてであろうかと考える平安時代竪穴式民家の復原には寡聞にして参考とすべきものは全くなく、意外に苦勞を重ねることとなった。

そこで先ず第一に、東国では11世紀代まで根強く残存した竪穴住居の形態、機能を見直し、生活空間を考えた。

次いで平安時代の絵巻にみられる庶民家屋図等を参考とし、東国の農民家屋を想定して適正な家屋の復原に努めた。

以下にその大要を記すこととしよう。

### 竪穴住居址の系譜

日本の庶民生活史の中で、最も基本となる民家は竪穴住居であり、その歴史は、現在知られる限りでは縄文時代早期に遡る。以来連綿として継承され、古代社会の文化・政治の中心であった大和・河内の先進地域でも6世紀中頃の大坂府大園遺跡で掘立柱式住居のみの集落が出現する頃までは、竪穴住居が優位を占め、関東～東北ではかなり遅れるが、平安時代末の11世紀頃には急速に消滅していく。即ちこれは縄文時代以来大凡そ9,000年もの実に長い生命を保った家屋構造である。そして、文化や気温に左右されてのことと思われるが、その消滅期は一様ではない。と同時に勿論この長い間の家屋が全て北方系の竪穴住居のみであったわけではなく、弥生時代には南方系の高床建造物が受容され、以来時と共に様々な建築様式が伝えられて順次消化され、日本の風土に合った独特の和風建築が中世期に成立するのである。

さて、その始源期の竪穴式住居は、ごく近年の調査で次第に明らかとなりつつあるが、井草Ⅰ→井草Ⅱ・大丸→夏島→稻荷台→大浦山・花輪台Ⅰと編年される撚糸文系文化早期の初頭期から、千葉県西ノ城貝塚、東京都多摩ニュータウン No. 52 地点の如く、井草式土器を伴う竪穴住居址が発見され、横須賀市内

でも長井町台地上の内原で大浦山式土器を伴った早期後半の竪穴住居址が調査されるなど、現在では調査例も増加しているようである。

このほど手元に贈られた東京天文台遺跡の研究報告書によれば、稲荷台期の居址3軒の発見例が報告されており、この稲荷台式土器はC<sub>14</sub>の測定結果では約9,000年前とされているので、これを信用する限り井草期の住居址はおおよそ1万年前に相当することになる。

1971年に W. Dansgaard らによって報告されている高緯度地方の降雪中の「酸素同位体比の変化」によって考察された約9,000年前は、気候最良期の少し前に当たる、とされているので、こうした気候緩和が反映されてか、縄文早期の竪穴住居は一般に浅く、また炉のない住居のあることが特筆される。

昭和55年に吾々が市内長井町F地点で調査発見した縄文早期の竪穴住居は、掘り込みの深さ15cm～25cm、広さは6.16m×5.4m（約33m<sup>2</sup>）の不整な隅丸形状を呈している。なお、中央部に1m四方ほどの浅い掘り込みがあって、その掘り込み部の四隅に80cm間隔の柱穴が4本掘り込まれ、竪穴壁とこの中央部柱穴の中間位に各辺4本、計12本の柱穴が1m～1.3mの間隔でほぼ等間に掘られている。さらに竪穴の四隅には、この柱列の50～60cm外側に、それぞれ掘り込みの浅い補助柱穴と思われるものがある。この狭い床面積内に実に21本という多くの柱が整然として配列している様子を想像すると、まさに林立といった形容がふさわしい状態で、しかも火を焚いた炉址もなく、一見して一家族集団が十分に住み得ただろうかと疑わざるを得ない様な竪穴住居址である。

東京天文台遺跡3号住居址の場合も全く同様に、内原の場合よりも更にもう一列竪穴の壁に沿って各辺4本宛多く配列し、計32本の柱穴によって構成された上屋構造の家屋である。床面積は約68m<sup>2</sup>で広いが、ここでも炉址は発見されていない。

柱は径10cm以下の細材が多く用いられている。従って報告者（佐々孝）は「径10cmの柱を地表から打ち込むことはできないので、前もって柱の太さに掘り込んであり、その中に刺し込んだと思われる」と述べている。内原の場合も同様に細材が多く使われ、床面での掘り形は30cm前後の径をもっているが、深

さ30～40cmほどの柱根部は、やはり10cm前後のものが多く、しかも端部を尖らしたと思われる状態のものがみられた。この場合は或る程度は礫器で掘り込み、さらに柱を上から打ち込んで固定したのでは、と考えられた。

このような共通データをもつ住居の上屋構造は、多くの叉首を地上から立てかけ、屋根材を地上にまで葺き降ろした所謂「犬登せ造り」の蓋屋をもつものであったかと思われる。この屋根の重量を支えるために非常に多くの柱を建てなければならなかったのが、中央部の四本柱を始め、こうした柱の林立する特異な家屋を作り上げたのであろう。

それにしても炉をもたないと云うことは非常に大きな問題で、炊事・暖房・採光の多目的を有するだけに不可思議な現象である。彼等が家屋をもつ以前からの野外の焚火による調理法が伝統的に継承されていた故であろうか。また生活の主体が野外に在ったので、夜間の照明は必要としなかったか、或いは獸脂を燈火にする技術が既に在ったのであろうか。仮にそれらを認めたとしても暖房の目的は達せられない。これについては、たまたま季節使用の仮屋であったと理解することもできるが、何れも立証性には乏しい。そこで中央部にある浅い掘り込みが問題になる。佐々孝はこれについて興味ある理解を示している。つまり、`この掘り形内に灰を沢山入れて、その上で火を焚けば、床面は直接焼けることはない。木灰の主成分である炭酸カリウムや炭酸カルシウムは水や酸に溶けやすく、何ら痕跡の残らない場合が考えられる。` という主旨である。しかし、仮に焦土や灰の残存しないことを了としても、炭化物の全く遺存しないことはどうしたことであろう。内原遺跡の場合は凹み石がこの部分から発見されているので厨房的な関係を持つ場所であろうことは云い得ていよう。

縄文時代には屋外施設として焼石炉の発見される場合がある。東京天文台遺跡ではその存在が報ぜられている。焼石で調理や煮沸することは未開民族例にも見られ、屋外生活中心の当時にあっては屋内の採暖は燠火<sup>おきび</sup>利用程度のものであったのか。しかし、一方において、多くはないにしても炉と思われる焦土を伴う住居址も他遺跡には存在する。それぞれの集落を構成した人の文化的系列の違いによるものであろうか、今後の大きな課題の一つである。

縄文時代前期の住居址は、より明確な方形形態を示すが、プランは長方形→台形→方形へと推移するようである。炉は屋内に設けられ、柱も6本、4本のものが多いが、壁に沿って径10cm以下の小柱穴が密集して並ぶものも長方形・台形プランにはみられる。小屋組みを支える大柱と、多くの叉首をもたせて固定する細木支柱の穴であろう。早期の住居址に比べると、生活空間がより合理的に考えられるようになったことを意味する。この前期までは海浸期で、気温は比較的高かったと考えられるが、掘り形は一般に早期より明瞭となる。或いは礫器から定形化された石斧へと掘具の発達によるものであろうか。

縄文中期には海退期に入り、気温も下降し始めたと考えられるが、この期の竪穴は従来 of 時期の竪穴からみると平均して深くなる。寒期の保温に備える必要からであろうか。貯蔵穴が多く作られるようになるのも、立派な石組み炉が出現することも、炉中に火壺を埋めて火気の保存に留意する傾向も、全て関連した生活の智慧からであろう。

竪穴のプランは円型が主体で、屋内の熱伝導の平均化を図ったためかとも考えられる。しかし、地域によっては多角形、楕円形のものもあり、敷石住居と呼ばれるものもあるが、今回は触れぬこととして、サケ・マスの遡行する豪雪の新潟県・富山県下などでは卵形の珍しい竪穴プランが発見される。栃尾市栃倉の2号址では、長径7.9m、短径5.7mの二段に掘り窪められた床面上に幅45cm、長さ2m余の長大な石組み炉が設けられ、卵形に尖った方向の炉の短辺は石組を欠いている。炉底は浅く掘り窪めて、十数個体分の土器を打ち割ってモザイクのように敷き詰めたコの字形炉を呈する。第1号址は長径10.4m、短径8.6mの大型家屋であるが、炉幅は50cm×170cmと少し短い、しかし一般よりは遥かに長大である。プランの卵形は、恐らく長大な火勢のあがる炉に対応するための上屋構造が必要であったためと考えられた。この長大な炉では、晩秋から初冬期にかけてのサケ・マスの大量漁獲を焼き上げて貯蔵するための共同加工炉であったと理解している。

富山県不動堂遺跡で発見された17m×8m(115m<sup>2</sup>)という長楕円形プランの超大型の竪穴住居址には、周囲に16本の柱穴があり、4個の炉が長軸にそっ

て一列ほぼ等隔に並んでいる。この長楕円形家屋の棟木は当然長いので両端部に棟持柱が掘り込まれている。桁倉の卵形家屋の場合も片方の棟持柱が検出されているが、何れもかなり高い堅固な上屋を考えてよいであろう。当時も長く雪に閉じ込められる気候であったとすれば、そうした共同体の貯備食糧の製造、貯蔵と、共同体員の作業・集会・避難等々のための共有の建物であったことも考えられる。

一般の竪穴面積は、20m<sup>2</sup>前後の規模が多く、また柱穴も4本から8本程度までが最も類例の多い様相であろう。そうした平均的床面積の竪穴内から5人の白骨死体が発見された珍しい遺跡がある。千葉県姥山貝塚の貝層下に発見された住居址である。このミステリー的な5人の遺体は、極めて至短時間内に相次いで死に至ったものと理解されている。それはこの5人のそれぞれが竪穴住居址内に各様の姿態で倒れており、埋葬された状態とは全く異なることで、中毒死ではないかと推断されている。とすると、平均的竪穴住居に住んだ家族人口は5人程度であると云える。

また、中期には人口密度の上昇期であったものか、大規模集落が多く発見されているが、町田市鶴川遺跡の場合、J地点では台地上に42軒を全掘したが、それは5ないし6群に分かれて世代交替が行われた可能性が高い。数軒の時期未決定住居を除いて、5～6軒の小単位集団がこの集落構成の同族戸であって、中期前半Ⅱ期の頃に5戸が定着し、季節移動を行いながら中期後半Ⅰ期は10軒、Ⅱ期に16軒（この時期に1戸が分戸し6戸となる）、Ⅲ期に7軒と消長を重ねたものと思われる。

また、千葉県貝ノ花貝塚例では35軒のうち、小単位集団としての同族戸は幾つに分かれるかは不明であるが、中期後半Ⅰ期に8軒、Ⅱ期には12軒、後期前半Ⅰ期には6軒、同Ⅱ期には3軒が同時共存関係を示していたと分析している。勿論遺跡の規模によって集団構成も異なるから一概にいえぬが、決して多くないことは事実である。後期の集落は中期からみると人口減少の様相がみられるが、竪穴住居そのものには大きな変化はない。晩期を迎えると東北地方にはかなり繁栄するが関東以西では非常に過疎現象が目立ってくる。従って竪穴

住居の発見例も多くはないが、円形プランの他に、後期末から再び現われる方形プランを継承する傾向が増大し、支柱穴は後期以降4本を中心とした配列が比較的定着してくる。

弥生時代に入ると、北九州では方形プラン、畿内では円形プランの堅穴がそれぞれ主流を占めるようになるが、東日本では中期を迎える頃まで弥生文化は波及してきていない。堅穴には縄文時代に多くみられたような多柱式はなく、4柱穴が一般的である。床面積も余り際立った変化はない。中期には一般に円形・方形が混在し、特に深い堅穴はみられなくなる。

後期に入ると基本的には方形プランが全土に広がるが、畿内ではなお根強く円形プランも残り、東日本では方形を基調とした隅丸方形ないしは、長方形隅丸の所謂小判型のプランも目立つ。と共に炉の位置に多少の変化が生じ、必ず中央から一方に偏して柱穴間に近い位置に発見される。また石組みはなく、末期になると、一般に枕石などと呼ばれる一個の棒状河原石を、掘りくぼめた自然炉の内側に添える。その効用は不明であるが、古墳時代前期まで続く。横浜市三殿台遺跡では130 m<sup>2</sup>という超大型の堅穴プランもあるが、稲作農耕を中心とした富を集積した家屋というよりは、村落共同体の必要共同の建造物であったと考えたい。

弥生時代に至っても住居プランは単純ではないが、縄文時代ほどのバリエーションはなく、幾つかの類型にしぼることができる。その復原家屋は、静岡県登呂遺跡例が最も歴史的に古く、また典型といえよう。

また、この弥生時代には、新たに掘立柱形式の高床建築が加わることは改めて述べるまでもなく、南方系の建造物で、稲作農耕文化の定着と共に受容され、日本の建築史上重要な意義を添えることとなる。静岡県山木遺跡などから発見された大量の建築材、伝讃岐出土の銅鐸絵画などから推して穀倉として建てられたことが知られる。

古墳時代に入り、統一的な国家権力が成長してくると、自づと大王の宮殿も営まれるようになるが、4世紀代の代表的な前方後円墳として知られる奈良県東大寺山古墳出土「中平年銘環頭大刀」の柄頭（第1図—2参照）にデザインさ

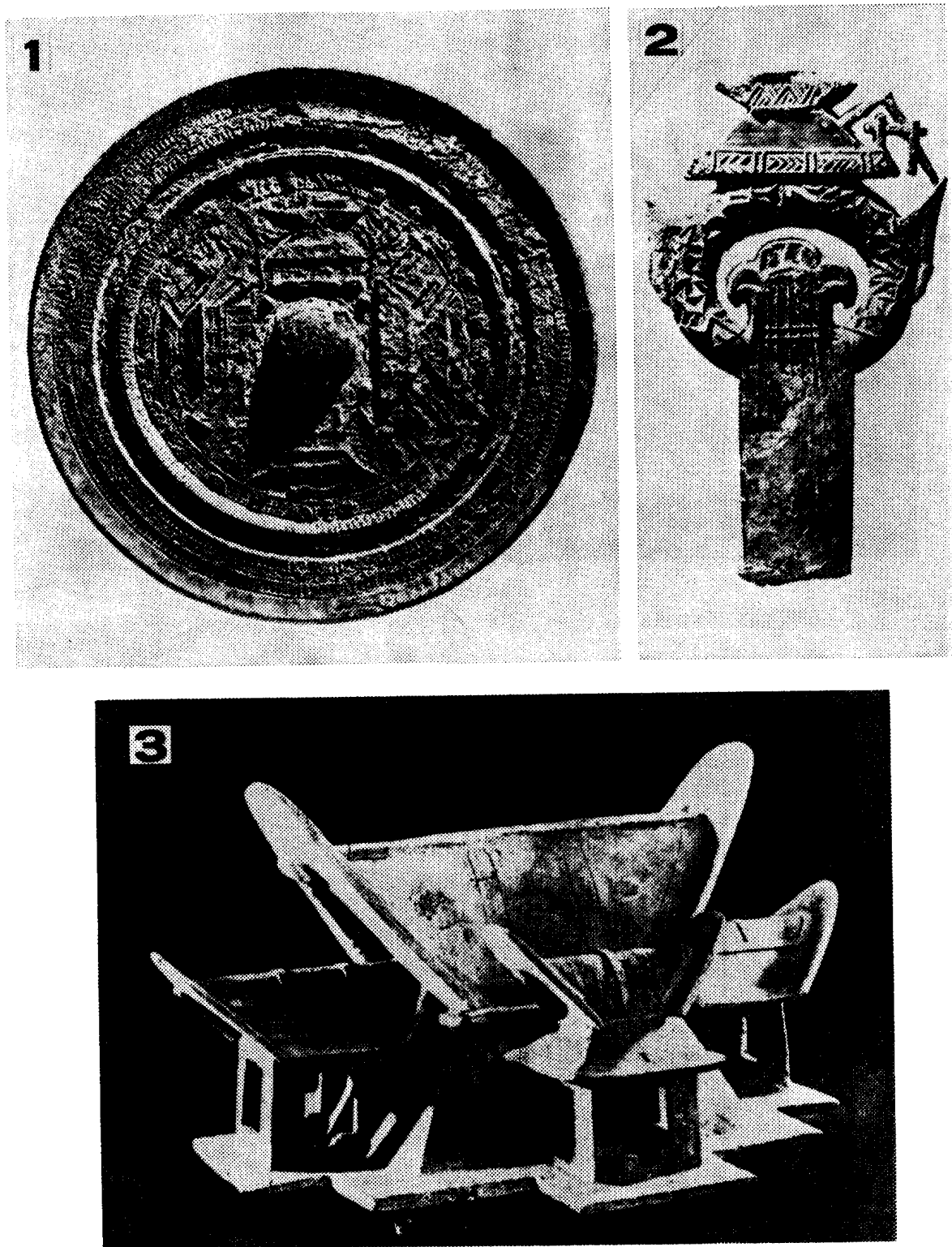
れた如く、門口を飾り立てた竪穴住居の類は、弥生時代の王者の家から始まるものではなかったかと憶測しているが、さらにこの造りは、4世紀末頃に比定される同県佐味田宝塚古墳出土の鏡（第1図—1参照）に鋳出された家屋文に受け継がれ、5世紀代の宮崎県西都原古墳群出土の埴輪家（第1図—3参照）にまで続く。大規模な竪穴上に所謂「犬登せ造り」の、大きな棟と破風をもつ雄大な草葺きの上屋をそっくり地上に伏せた、古典にいう「大室屋」に該当すると思われる主屋に、家屋文鏡では「きぬがさ」が飾られ、埴輪家の場合は四方に「切り妻」と「入母屋」形式の付属屋が交互に付いている。土台をめぐらし、高い軒と壁をもった「切り上げ造り」の付属屋が土間であったか床張りであったか不明であるが、5世紀まで、竪穴上に蓋屋が葺き降ろされた家の在ったことと、平地に土台をめぐらす「切り上げ造り」の家が併存していたことは、家屋文鏡の図様と共に説得力ある証明といえよう。

この古墳時代中期末の復原家屋として知られているのが、長野県平出遺跡第3号住居址（第2図参照）である。復原考証に当たった藤島亥治郎博士は「本址において切上造を認めることは、復原上かなり大胆であるという批評を受けるに相違ない。……軒が地上を離れ、壁体の発生する時期の遺跡よりの認定は、建築史上重要な問題である。」と述べ、「佐味田宝塚古墳出土鏡背家屋図や埴輪には、四、五世紀頃に「切上げ造」と「犬登せ造」との共存を示すにしても、遺址により実証することができなかった。」と。理論的には肯定し得ても遺跡の上からの立証は埋没家屋でも発見されぬ限り不可能に近い。しかし、この松本平では炉からカマドに移行した時期であり、このことが上屋構造変換の一つの転機となる可能性は強い。

また、この復原家屋も基本的には縄文以来の又首組み構造を用い、椀との組み合わせによって重力の軽減に意を注いでいる。

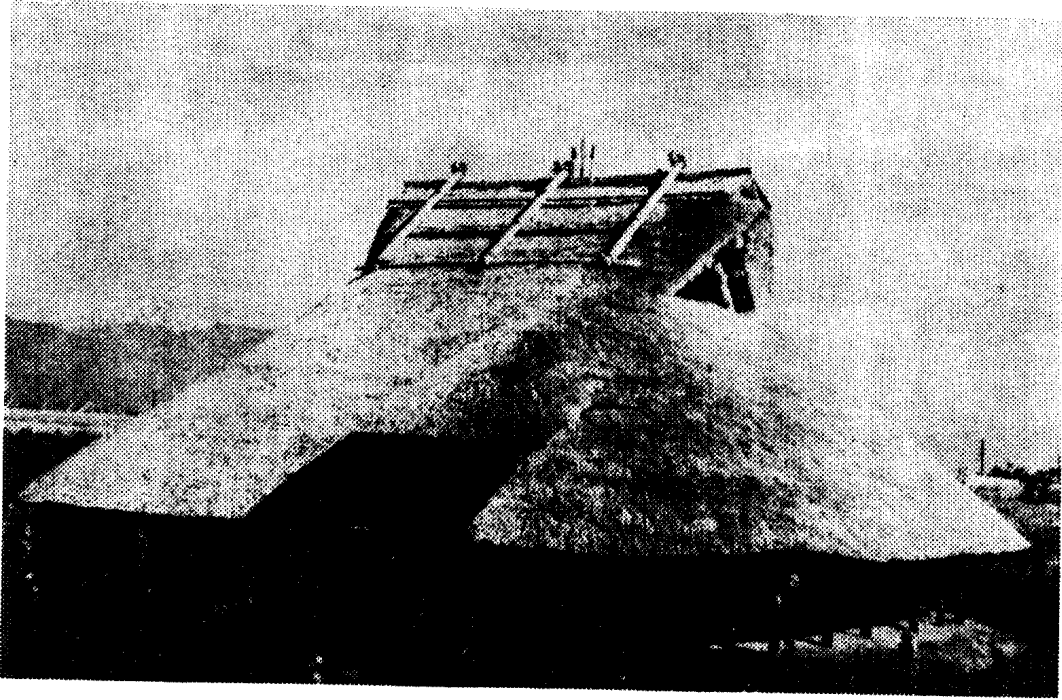
古墳時代後半を迎えると畿内では更に「置きカマド」が作られるようになる。と同時に竪穴住居が急速に衰退の傾向を示し、7世紀を迎える頃には全て掘立柱式住居に変わってしまう。この置きカマドは素焼きの焼きもので、どこにでも簡便に移動させることができる。



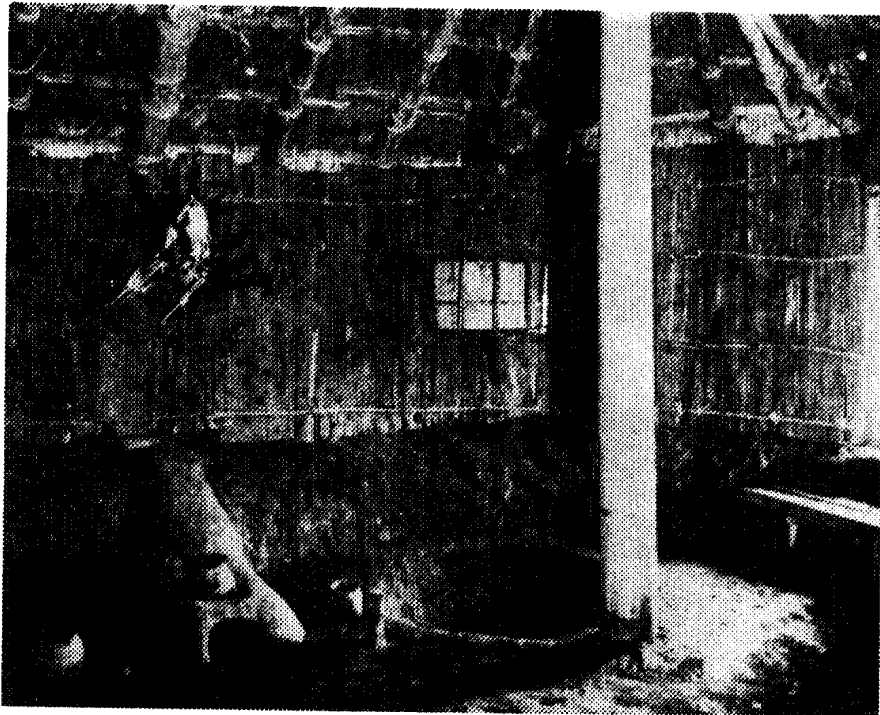


第 1 図

1. 家屋文鏡—奈良・佐味田宝塚古墳出土（4 C）
2. 環頭大刀の柄頭飾—奈良・東大寺山古墳出土（4 C）
3. 家形埴輪—宮崎・西都原古墳群出土（5 C）



全 景 (正面)



同 内 部 (入口, カマド付近)

第 2 図

長野・平出遺跡復原家屋 (古墳時代中期)

つまり、これまでの作り付けのカマドは、竪穴の掘り込みの壁を利用したものであるから、竪穴が無くなれば、当然代わるべきカマドが必要となる。しかし、火を焚く以上は、土の上に置かねばならない。掘立柱家屋には当然床が張られていたものと理解するが、その一部に土間を有する構造であったか、或いは別にカマド屋を付属させるものであったと考えざるを得ないが、多くの家屋跡には二間三間ほどの柱穴列が発見されるだけで構造そのものは推測以外に確証はできない。

この古墳時代後期は勿論のこと、以後平安時代後半まで、既に述べたように関東を中心とする東日本では、依然として竪穴住居が継続する。そして東国でも11世紀には羽釜や置きカマドが現われるようになると急速に竪穴住居は見られなくなるのである。

### まとめと問題点

以上を要約すると、竪穴住居の淵源は古く、炉を使用していた時期（縄文早期の炉を持たない住居址も含め、以降古墳時代の5世紀後半～6世紀初頭頃まで）は概ね蓋屋を地上に葺き降ろした「犬登せ造り」構造のようであった。家屋の軒が上がり、四囲に壁が作られる「切上げ造り」になった最終的要因の一つに炉から作り付けカマドへの転換が挙げられよう。そしてこの転換の要因には帰化人の大量渡来が関わっていたと考える。従って当時は従来の竪穴上に屋根を伏せたような構造（東大寺山出土環頭大刀頭の文様、家屋文鏡・西都原古墳群出土家型埴輪主屋）と、軒の上がった構造（家屋文鏡）の両者が混在し、さらに王者級の掘立柱式の高床宮殿（家屋文鏡）などが混在していたものと考えられる。

そして、これに次ぐ竪穴自体の消滅という現象も、有力帰化人層の多く定着した河内・大和などの畿内からおこり、避遠の地域は、5世紀以上も遅れて現われる結果となったが、これも作り付けカマドから置きカマドへの転換が大きく関わっている。厨房構造の変化が家屋自体の様式変化と大きく関わり合っていることは、考えようによっては当然のことであるかも知れぬが、生活文化の

基本的な問題として改めて指摘する必要がある。

さて、次いで竪穴プランについて見ると、様式的には縄文時代が最も複雑であり、方形・円形・長方形・楕円形・多角形・卵形、それに特殊な敷石構造と多数多様である。しかもこれらのうち最も基本型である方形・円形が繰り返えし主流を占めるといふ現象がみられる。

ところで、弥生時代に入ると、円形・隅丸の方形・隅丸胴張りの長方形（所謂小判型も含まれる）の三者が基本型として次第に整理され、古墳時代初頭期には隅丸の方形にほぼ統一されてくる。以来多少の差異はあるにしても、方形・長方形が家屋の基本的プランとして定着し、平安時代を迎えるのである。

次に重要なことは、その竪穴床面積の問題である。

縄文時代の竪穴に関しては宮本長三郎「関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷」の中で算出しているので、便宜参考とすると以下のようにまとめられる。

(単位m <sup>2</sup> )	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期
最大平均	28.58	46.48	45.35	86.05	81.9
最小平均	5.63	4.32	5.78	10.2	28.5
平 均	13.73	18.14	17.13	29.55	45.2

以上の表をみると、縄文時代では、前・中期の間の低迷期を除いて、その平均床面積は急速な伸びがみられる。そして晩期を迎えると平均45m<sup>2</sup>（現量数29畳強）という広さをもつことになる。

これが、生活文化の向上に結ばれる現象か、家族構成の変化に由来するものか定かではないが、早期13.73m<sup>2</sup>という面積は、主として生活文化の低さに由因するものと考えてよいであろう。

また、中期に5名前後の家族人口が一般的であったとすれば、17～18m<sup>2</sup>程度で縄文時代相当の文化生活は営なみ得たという事になるろうか。

弥生時代に入ると縄文晩期よりむしろ一般に小形化する。因みに横須賀市鴨居上の台遺跡を例に考えてみると、弥生後期から古墳時代前期に該当する126軒のうち最大級の竪穴は82号住居址で不整であるが円形として計算すると床面

積  $56.71 \text{ m}^2$ となる（プランメーターが備えてないので正確ではないが $+\alpha$ の面積となろう）、逆に最小の竪穴は103号住居址の $5.30 \text{ m}^2$ であるが、 $10 \text{ m}^2$ 以下を示すものは他に1～2軒程度の模様である。平均値は $24 \text{ m}^2$ 前後が考えられる。

三浦半島の如く稲作農耕面積の豊かでなかったと考えられる地に在ってすら約16畳分の床面積が推測されるわけである。

次いで古墳時代後期の例を千葉県大谷口遺跡によってみると、21軒の平均  $40.30 \text{ m}^2$ と非常に広い。広大な内陸耕地をもった人々の収穫の豊かさか、社会構造の変革が齎した結果であろうか。そして奈良時代を迎えると海老名市本郷遺跡の場合 $16 \text{ m}^2$ 程度が平均値となり急速に小型化する。男子6才以上に対して2段（約24 a），女子はその $\frac{2}{3}$ の口分田を班給する，と田令に規定されている律令社会の一般的農民の住宅は，10畳余の竪穴に縮少されることになる。まさに縄文前・中期の原始時代の住居面積に及ばないというこの数値をどう考えるかの問題に迫られることになる。

しかも，平安時代に入ると，更に竪穴の面積は縮少され，本郷遺跡の場合，平均 $10 \text{ m}^2$ 前後にダウンする。こうした現象は，一遺跡における特殊な傾向ではない。縄文早期に在っても $13 \text{ m}^2$ を上廻る床面積であった。しかも奈良時代以降人口の激減現象を記した記録を知らないし，少なくとも人々の生活文化水準は縄文時代より向上している筈であるにもかかわらず竪穴に表れる生活空間は完全に反比例的現象を示している。

従来こうした考古学的事象に基づいての発想ではなく，奈良時代の文書に基づいて，班田農民の逃亡者や浮浪人の増大する現象を説明するのに常に山上憶良の「貧窮問答歌」（万葉集卷五，892）が引用されてきた。

伏<sup>ふ</sup>盧<sup>せ</sup>の曲<sup>まげ</sup>盧<sup>い</sup>の内に直<sup>ひ</sup>土<sup>た</sup>に藁<sup>わら</sup>解<sup>と</sup>き敷<sup>き</sup>きて，父母<sup>ふぼ</sup>は枕<sup>まくら</sup>の方に，妻子<sup>めこ</sup>どもは足<sup>あし</sup>の方に<sup>かく</sup>囲<sup>かこ</sup>み居<sup>い</sup>て……。

平均的家屋の場合， $16 \text{ m}^2$ （10畳余）の中からカマドの周辺や，柱の隅，家財，什器の占める場などは当然生活空間ではあっても家族の占位空間ではないから，これらを差引くと恐らく4人家族では一人平均 $2.75 \text{ m}^2$ ，5人の場合は $2.2 \text{ m}^2$ 程度となり，畳数では1.79畳以下に当たることとなる。とすれば，まさ

に憶良の歌の如くである。

ところで、東国における奈良時代一戸の人口は平均21人程度であろうことを沢田吾一はその名著「奈良時代の数的研究」の中で述べている。この一戸は豎穴住居何軒をもって構成されたか、多くの集落が調査されながらも明解な答は出ていないが、おそらく4～5軒程度ではなかったかと想定されている。つまり一軒平均4～5人ほどの家族構成が考えられる。この推定に大きな変化がないとすれば、平安時代に至って更に縮少する豎穴面積内で、1人当たりの平均占位空間を4.62m<sup>2</sup>(3畳)と仮定しても一家族を到底収容し得ない状況となる。

また、国司の出挙<sup>すいこ</sup>、雑徭などによる収奪によって

竈には火氣<sup>ほけ</sup>ふき立てず、甌<sup>こしき</sup>には蜘蛛の巢懸<sup>か</sup>きて、飯炊ぐ<sup>いいかし</sup>ことも忘れて……

と憶良の歌いあげるほどに生活不安は高まり、楚取<sup>しもと</sup>る里長の声におびえ、逃亡、浮浪人の増大へと拍車をかけたのである。と、一般には説かれている。

だが、果たしてそうだろうか、ここには大きく見過ごされてきた問題があるようである。

その一つは、確かに逃亡、浮浪人の数は増大したが、しかし、一郷或いは一郡を壊滅させるほどの大事件にまで発展したケースは記録されていない。平均化された16m<sup>2</sup>という豎穴面積でさえも家族一人当たりの占位面積が上記の如くであれば、そしてその原因が国司の収奪にかかっているならば、当然国を挙げての問題となった筈である。一般的には、このような豎穴になんとか住み得たのである。平安時代に至って更に縮少する豎穴面積にも、やはり大同小異の家族が住み得た事実を遺跡は雄弁に物語っているのである。

第二には、カマドには火氣ふき立てず云々と詠まれている。そのカマドは豎穴面積が如何に小規模化されても、それに比例して小さくはならない事実である。従って逆に豎穴が小型化するほど、むしろカマドは不釣合なまでに立派に見えることは遺跡を調査する者の等しくうける実感である。

つまり、始めから平均家族を収容し得ないような小型の豎穴を掘り、立派なカマドを築くという矛盾、不合理を改めて検討する必要があるように思われ

る。

第三には、小型化された竪穴住居には、柱穴を持たない家が往々にして存在するという事実を、建築学的にどう考えるかということである。誰れしも柱のない家を想定することはできない。そこで当然、竪穴の周囲に土台を置いて、その上に柱を建てたと考えざるを得ないであろう。

ここで、この第三の考え方を、柱をもつ竪穴にも適応させ、絶対不足占位面積を竪穴周囲の地上に求めて、土台上に蓋屋部を拡大したとすれば、十分に解決しうるものではないかと考えたのである。柱穴が竪穴外には掘られなかった理由も理解されるし、カマドが不相応に立派であったわけでもなくなる。

しかし、このようなことが不思議と今迄に考えられたことがない。特に東日本では奈良時代以降の狭隘な住居址の発掘軒数は日増しに累加されているのが現状であり、多くの研究者が盛んに意欲を燃やし続けている集落構造論は、基は一軒の占有面積にかかわってくるので、決して他分野の問題として等閑視し得ない課題であると考ええる。

さて、竪穴住居の系譜を追うことによって、絶対人口の決して多くなかったと考えられる縄文時代においてすら、千葉県姥山貝塚下に発見された竪穴住居址内の不慮の遺体から5人程度の家族構成が知られ、また奈良時代の戸籍断簡から復原された戸の人口と、それから導き出される一家族集団の構成員は平均4～5人であったと考えられる。とすれば、少なくとも奈良時代以降においても家族収容の必要最低の床面積は18㎡前後以上と考えるべきで、文化・社会の発展度と共に、家屋が生活の中心の場となってくるにつれて必要生活空間も拡大されていくであろうから、古墳時代後期に40㎡前後が平均的面積だとするならば、当然奈良時代以降にあっては同等以上の床面積を有したであろうとの論理で山梨市日下部遺跡の復原構想を練った。

この推定復原に当たって大いに参考にしたのは『年中行事絵巻』、『信貴山縁起』絵巻など（第3図1～4参照）である。

年中行事絵巻は福山敏男博士によると、「平安時代の末期、12世紀後半における朝廷・貴族を中心とする年中行事に、京都付近の庶民のそれも加えて、人

々の動きをその環境とともにとらえ、それらをつとめて正確に描出し、これを後世に伝えようとして作られたのが、この年中行事絵巻である。」そして当時の宮殿建築や、貴族の邸宅と共に町家・神社・寺院をも画き留めている。この絵巻を作らしめたのは後白河法皇であり、絵師は常盤光長を中心とする複数の人物であろうと推定している。

さて、こうした由来をもつ年中行事絵巻を繙くと、勿論12世紀の時点では文化的に大きく立ち遅れている関東でも竪穴住居は消滅している。まして畿内では上り框を付けた揚げ床の民家が一般的であるが、「城南宮祭」や「今宮祭」と推定される祭礼図には、地上に土台を置いて、その上に床張りをした、極めて低い板張りの前殿が社の前に建てられている。さらに、「某社祭」の絵には、掘立て柱を主体とする立派な檜皮葺きの社殿に続いてL字型に曲る脇殿が描出されているが、板屋根のこの建物は地上に土台をめぐらし、土台上に柱を建て、床を張っている。

このように神社の脇殿や前殿、つまり二次的な感覚で扱えられる建物には、土台に床張りをし、吹放しとなっている板葺き家屋が多くみられる。

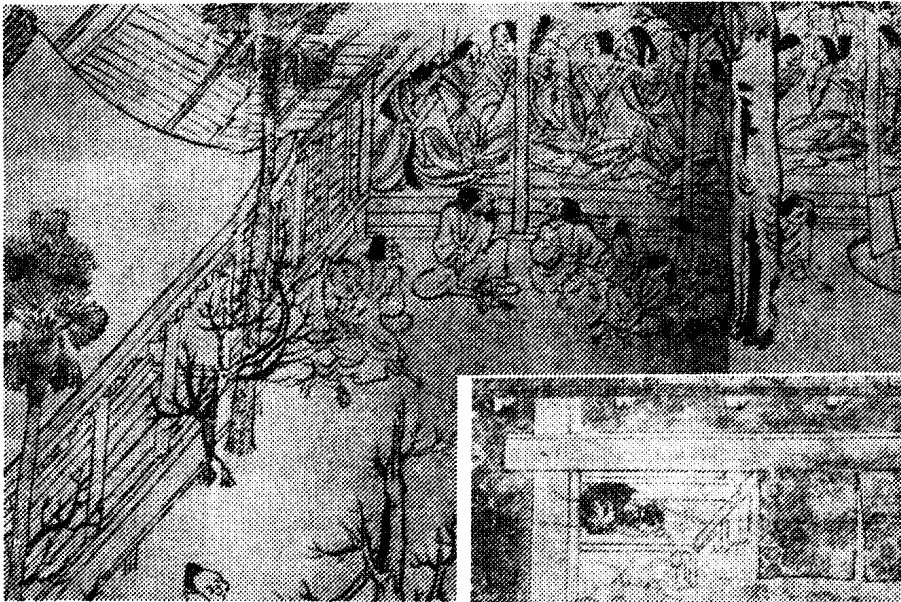
一般民家の描写も多いが、明瞭なものは少ない、しかし「馬長の行列」に描かれた民家には土台に縁框を付けて床張りをしたと思われる板敷きの窺われるものがあり、『信貴山縁起』の老尼公が民家に立ち寄って話している図（第3図—2参照）は、まさに土台に付けた低い縁框に腰を降ろした構図である。

壁には板壁、また稀れには土壁もみられるが、多くは網代の化粧張りが施されている。壁芯が何であったかはわからない。

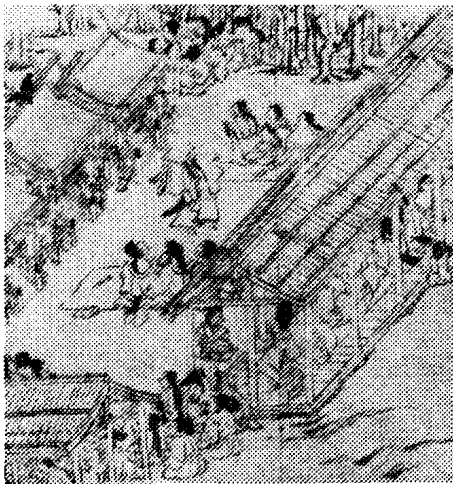
当時京での民家は板屋根の縦葺が全てであったようであり、その上に丸太材や太い樹枝を置いて石で押えている。内部の骨組み構造はよくわからないが、大人まで屋根に登っている図が少なくないので、かなりしっかりしたものであったことが知られる。屋根形式には切り妻、入り母屋、寄せ棟など各形式様々であるが、社殿の付属建物に多い切り妻の建物には、梁上に小屋束が明瞭に描かれており、古墳時代までの家屋復原に基本的な構造様式と考えられていた叉首に棟をもたせる上屋構造とは大きく変わり、現在の木造家屋に近づいてい



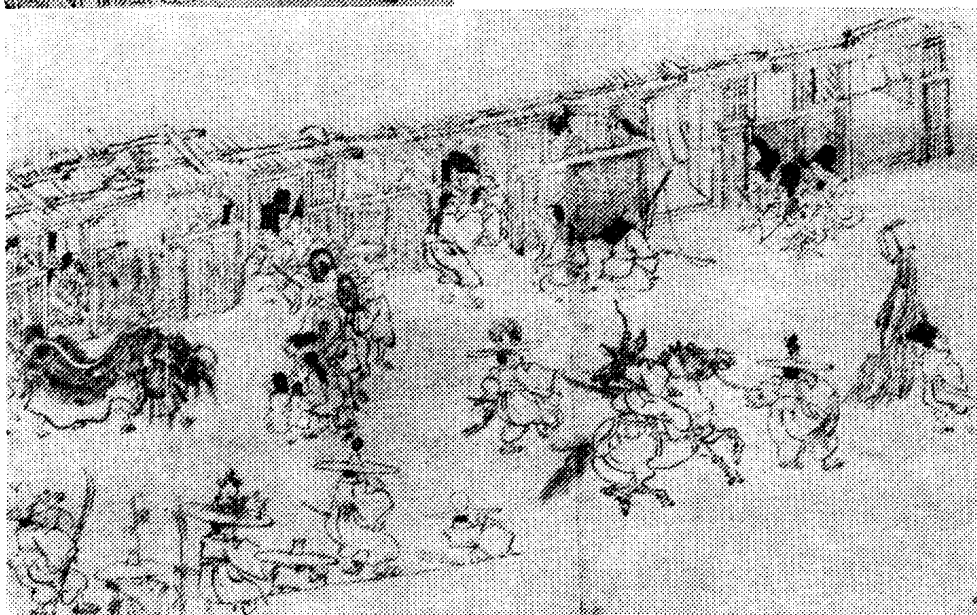
1 某社祭 (年中行事絵巻)  
2 信貴山縁起の民家 ↓



3 今宮祭 (年中行事絵巻)



4 馬長の行列 (年中行事絵巻)



第3図 絵巻物にみられる12世紀代の建築様式

る。

しかし、『信貴山縁起』などの絵巻には、棟持柱を用いたと思われる掘立柱土壁式の民家や萱葺の家屋もある。各種各様の民家が存在し、建築技術の進歩は一般民家にまでかなり及んでいることが推察される。10世紀の『池亭記』に「東の京の四条以北，乾良の二方は，人々貴賤なく群聚する所なり。高家門を比べ，堂を連らね，小屋壁を隔てて<sup>の\*</sup>簷を接す」と記されている。『年中行事絵巻』の中にみられる景観もまさにその通りの状況である。こうした京の貴賤混合居住の形態は，当然律令制の崩壊とともに起り始めた傾向と思われるから，かなり遡って民家建築の進歩発展に及ぼす影響は大であったと思われる。

このような古代末期に成立したとされる絵巻諸本を勘案すると，民家建築の場合，框もない土台上に直接床板を張る低い床から，土台上に縁り框を付け床板を張った家屋へ，そして更には上り框のり付け，より高い床の設定と，時と共に向上する生活文化の漸次発展と歩調を合わせて，次第に高い床へと変わったように考えられる。

そして中世の絵巻には，低い床は一般民家には見られなくなる。

以上に述べたような諸条件を基調として，次の如く平安前期に属する東国の竪穴住居復原の構想を考えた。

## 日下部遺跡第1号住居址の復原

先ず家屋復原に先立って，基本図形である竪穴実測図の検討修正から着手しなければならない。

その検討の第一に，この家屋の存立年代を明確にしておく必要がある。昭和25年「上代文化」19輯に「山梨県日下部中学校々庭集落遺跡」として筆者らが記した年代観は「奈良時代～平安時代初め」頃のものとして論じている。当時は歴史時代集落の発掘例そのものが極く稀れな時代で，土器の年代など思いもよらぬことであった。杉原荘介氏による国分式という分類に相当するもので，土師器の4期編年（和泉一鬼高一真間一国分）の最後の段階に該当することはわかって，氏の提唱する南関東の土器相と，山梨とでは全く異なり，まして現今

の如く、世紀で類別するほどの資料の集積は全くない時代であった。ただ幸いなことに、第2号住居址から<sup>かたい</sup>鍔帯金具（官人の用いるベルトの飾金具）が出土した。これは衣服令に規定されているものであるが、『日本後記』の延暦15年（796）と、弘仁元年（810）に鍔帯を用いることを禁ずることが記されている。そこで、延暦13年（794）に都は平安京に遷っているの、少なくとも奈良末から平安初頭頃のものであろう。との当時としては誠に大胆な推定であったが、土器の年代観にいて控え目な一石を投じたのである。近年頃に進展した山梨県の歴史時代土器編年図表に照合してみると、まさしく9世紀型土師器の中に位置づけられていて、山梨県における歴史時代土器編年論の原点は、日下部遺跡の研究から始まると評価されている。また、鍔帯金具や石帯の伴出例は、現在でも年代推定の大きな根拠とされている。

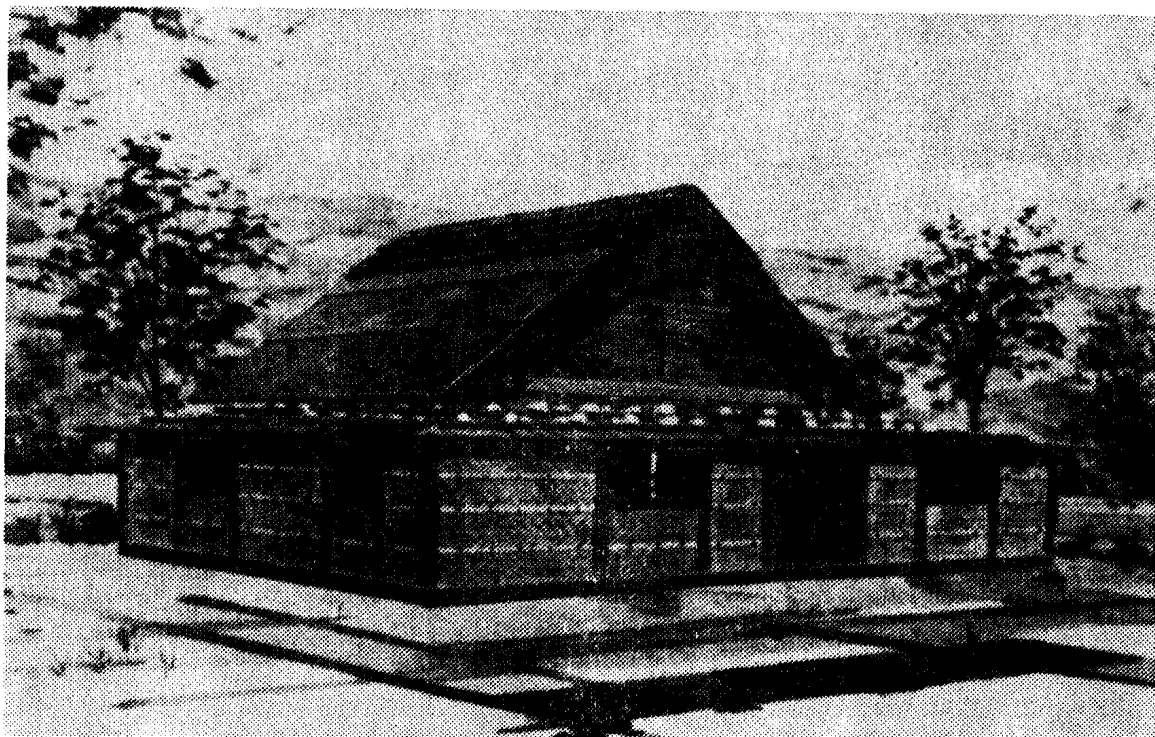
第二に、実測原図に対する検討である。当時の実測図は平板測量によって作製したものである。従ってメッシュを用いて測図する現在の方法とは、その精度にかなりの差がある。いま一つ当時の発掘調査条件が問題になる。学校の運動場整備工事によって発見された当遺跡は、既にブルドーザによる削土が進み、土器・焦土の多量の発見によって、理解ある上野校長が作業を中止し、調査を英断したもので、当時としては珍しいケースとして調査が開始されることになった。従って部分的には既にかなり破壊を受けており、ましてその立地は甲府盆地周辺の扇端部に位置しているため、砂質の軟質土壌中に堅穴が掘り込まれている。加えて桑園であったため、桑根による破壊度もかなり激しい。こうした諸条件を念頭に入れて原図の修正を図った結果、この堅穴住居プランのデータは次のように整理された。

住居址の大きさ

南北 4 m30	} 堅穴面積 16.34m <sup>2</sup>
東西 3 m80	
壁高20cm	

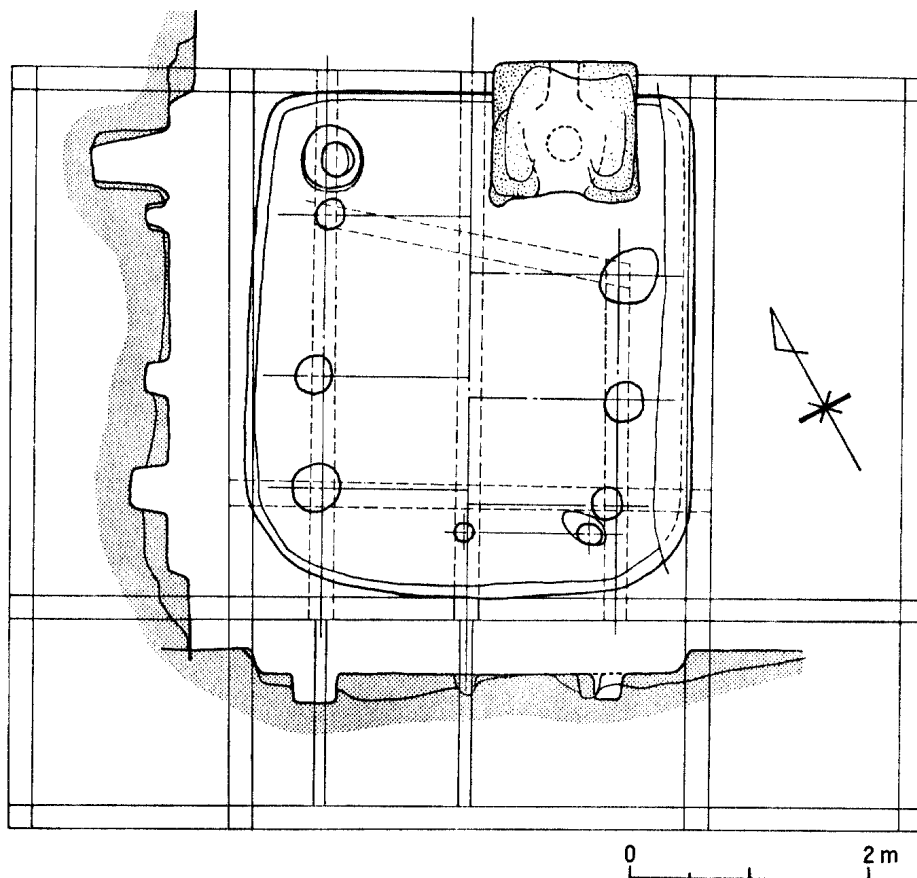
主柱穴

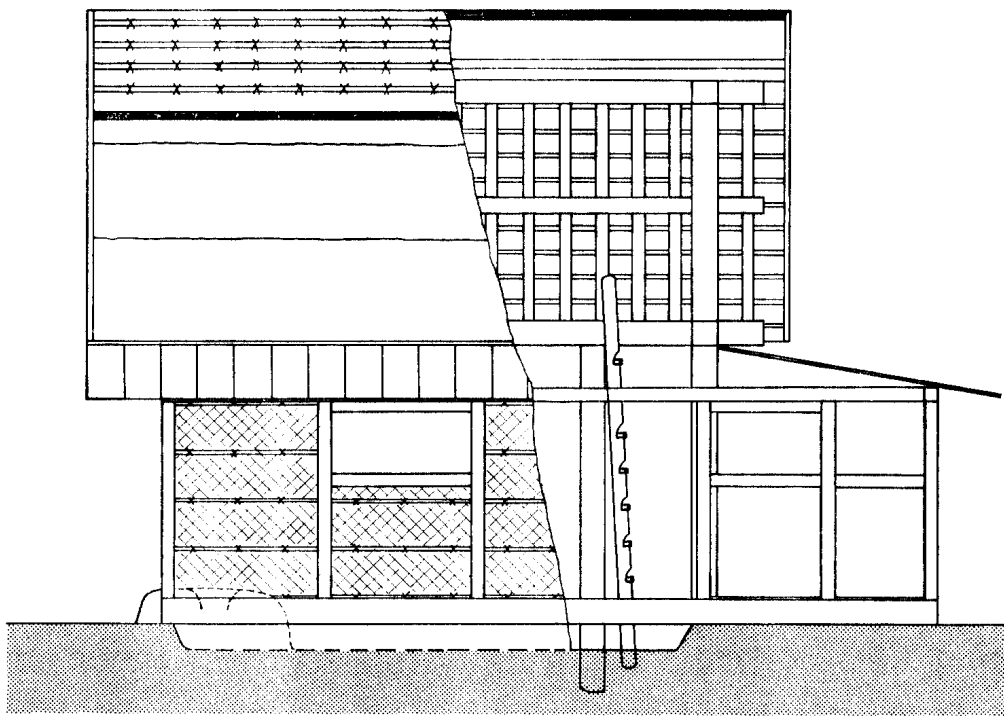
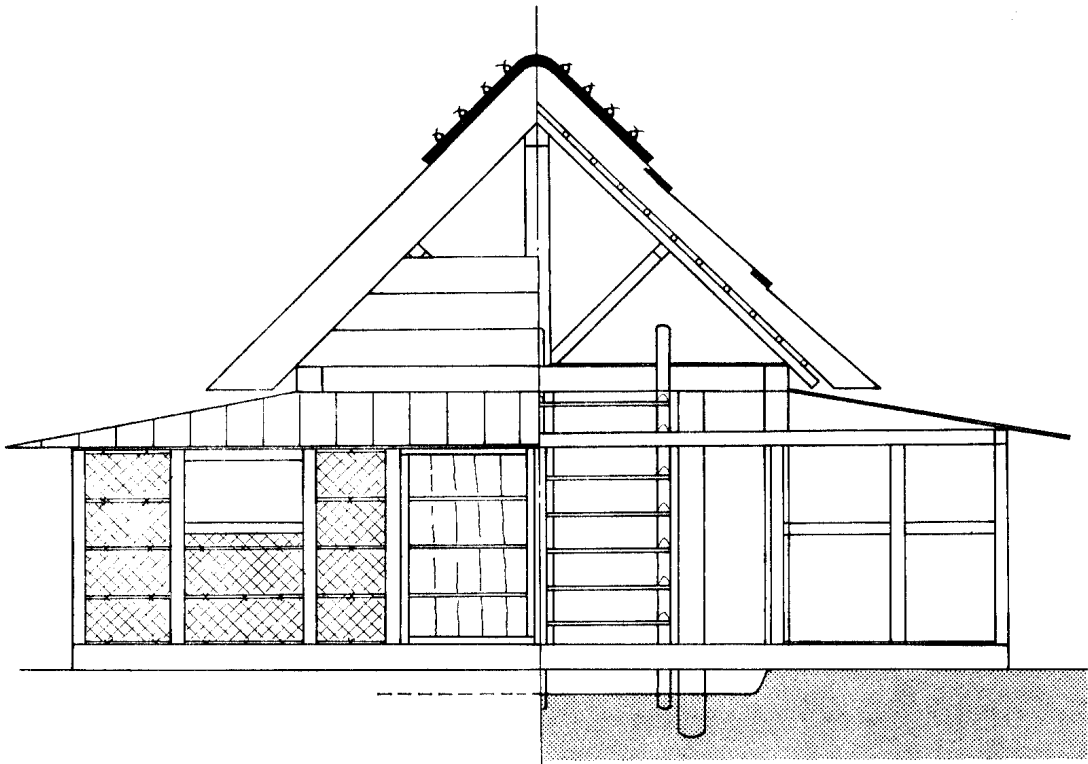
南北2列に3本宛、計6本、但し千鳥配置で、左右夫々の柱が対応して



第4図 平安時代家屋の復原想定図（山梨市日下部遺跡）  
イラスト 木浦原 誠（作製）

復原家屋平面図





第5図 上 復原家屋正面観 下 復原家屋側面観

いない。太さは夫々径20cm前後と推定。

#### 梯子穴

掘り形の径15cm，間隔1 mで，適切である。但し，壁高（竪穴の深さ）が現状20cmであるので+アルファの数值如何によっては，入口の梯子や段・土留めとも考えられるが，むしろ中二階への梯子と考えた方が適切であろう。

#### カマド

粘土組み，復原形は方形のようで，

長さ 115 cm	}	程度の立派な構造と思われる。
幅 120 cm		

さて，以上のことから，9世紀代の竪穴プランとしては小さくはないが，概して平均的な広さである。しかし，当時文化の水準から推して平均的家族の収容最低必要面積を古墳後期の大谷口遺跡を例として $40\text{cm} + \alpha$ とすれば，かなり狭隘である。従ってこの不足面積分を竪穴周囲の壁上に求め，土台を置き，床張りの部分を拡げた。この部分は当然支柱の外側であるので主屋の中には含まれない，つまり下屋造りを想定しなければならない。また，この下屋張出し部は，カマドの設けられた北側を除いた三方とする。

竪穴内は厨房と屋内作業を中心とする場で寝所・機織室・家財置場等は下屋の床張り部を間仕切りして設定する。という構想を樹てた。第4～5図は以上の構想の上に想定した基本設計図である。

遺跡での尺度はどの古代尺を用いたか算出できなかったので，竪穴以外の部分については，当時の人の平均身長を160 cmと仮定し，人の行動しうる空間を曲尺に相当させて算出した。従って下屋の張出しは180 cm一間幅とすると，この総面積は $46.36\text{m}^2$ となり，ほぼ充足される。このうち床張り部から入口，納屋等を除いても $21.6\text{m}^2$ （14畳）が床張り部の居住占位面積として残される。

さらに中二階の面積は約 $12\text{m}^2$ 弱であるから，これを季節的に蚕室と機織室に使い分ければ，家族の占位空間は一段と拡大する。

上屋構造は6本の支柱上に各240 cm（8尺）の桁・梁を組み，また竪穴上に

拡張した内側土台の四隅に立てた柱上にも桁・梁を渡し二重の枠組みとする。屋根の妻に表われている梁は、この外枠部である。この二重の枠組みを連結して竪穴の長軸心上に通し桁を渡し、軸心の土台上に立てた柱に受けさせる。この上に床を張れば屋根裏中二階となる。軸心上の柱はそのまま棟持柱とするか、小屋束を立てて棟を支えてもよい。しかし、後者の場合は「筋かい」を入れる必要がある。とすれば、狭い中二階の利用に不便を来たすので、この場合棟持柱と考えた。棟木の長さは5.5 mほどなので、千鳥に組まれる竪穴内主柱上に小屋束を立てる必要は殊更にはないと思う。

カマドの上方部と昇降用梯子の部分は棟まで吹き抜けとする。家屋内の煙出しと通風を助ける効用を果たし、採光と換気効力を強化するために、中二階の妻の部分には簾様のものを上半部に、下半部は板壁とする。この中二階の棟下の部分で高さ約2 m、面積の割合に比して行動範囲は狭いことになる。階下の高さも土台上2 mとすれば、土台の高さ+桁・梁の厚さ+大棟の厚さがこれに加わり、総高約5 m程度となろう。

張り出した下屋部分の屋根は $2/9$ 勾配で考えると、軒の高さ180 cm程度となる。屋根は野地板上にさらに板葺とする。軒壁の壁芯は不明である。絵巻には網代化粧の描写が非常に多く描かれている。農民の家屋としては、少ない板壁や土壁よりも萱や樹皮を芯とし、網代で押さえた壁を想定した方がふさわしい。窓は大きくとり、上げ葺とする。

幅130 cm前後と想定した出入口は、イラスト（第4図上）作製時には中央右寄りに指定したが、その後の考えでは左寄りにするのが妥当であったように思われる。平面図を参照すると一目でわかるように、二階への梯子の位置を考えると、入口用か二階用かとした梯子穴は後者と考えた方がより妥当であるからである。この出入用の扉には、樹皮を張り合わせ竹で押さえた片開きの扉を想定している。

最後に家屋の裏側（北側）であるが、特にカマドの部分について記すと、火災防止上この間取り部分だけは前述の壁では不適である。おそらく熱伝導の少ない石や粘土でカマドを包むようにし、その上方部のみ板壁もしくは土壁とし

たと思われるが、板壁の方がより古代的であると考える。

## 結 び

以上、平安前期の竪穴住居復原の基本構想について考える必要に迫られ、改めて竪穴住居址を整理してみると、何時の時代にも大小各様ではあるが、意外と古墳時代までは平均床面積の広いことが見直された。勿論いま少し遺跡例を多くみる必要もあろうが、それは今後の課題とし、それに対して少なくとも奈良～平安時代と竪穴の消滅期に近づくほどに床面積が極端に縮小化されていくこと、そしてこの時代には、憶良の長歌に類する悲劇的人生観を抱きながら生活する人々も居たことであろうが、若し16～10m<sup>2</sup>の平均的面積の竪穴内に住まねばならぬとしたら東国の大多数の民衆は全て生活し得ないことになる。しかも、小竪穴に不相应なカマドの発見される事実の矛盾を氷解するためには、竪穴外に家屋の拡張を図り、少なくとも古墳時代程度までの居住空間を復原する必要があるとの考えに及んだのである。

そこで、従来考えられなかった変則的な家屋を想定したが、こうした変則性がむしろ通常の在り方として、東国の竪穴終末期の一般の農民家屋を考えてみる必要があるのではないだろうか。

(神奈川歯科大学助教授)